

秋田県産木材で地域おこしをしたい
そして国内外へ魅力発信を

布田 信哉 秋田ノ家興職人

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催：LEXUS)が、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かし、新しいモノづくりの挑戦に「匠」を応援する。

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト/アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠研究所)らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主権のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨年度、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。

1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー、メディア・デザイン関係者

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援



1月24日、プレゼンテーションにて

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。

秋田県選出の匠、家具職人の布田信哉さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。



プレゼンをする布田さん

本本来のデザインを作品に生かしたい

自然豊かな北秋田市鷹巣地区。かつて林業で栄えたこの地域を、自身の木工作品を通して盛り上げようとする布田さん。地区の中心市街地活性化に取り組み「北秋田遊地祭(あじさい)PROJECT」のメンバーとして秋田県産材を使用した人形車を製作。黒塗りでではなく、木目を生かした人形車はめずらしく、鷹巣地区の話題作りに貢献している。また、工房で製作した調理器具などの小物や家具などを、鷹ノ巣駅から徒歩1分の自身がオーナーを務めるカフェ「HOLTO(ホルト)カフェ&ギャラリー」で展示している。木のぬくもりと癒しを感じながらコーヒーなどを楽しめる店だ。列車を利用するお年寄りや高校生の人店も多く、最近では秋田内陸線を利用する外国人旅行者も増えているという。



自然が広がる北秋田市

子どもの頃の将来の夢は木材を取り扱う仕事に就くこと。高校を卒業後、一時は木工関係とは違う職種で働いたが、夢を捨てきれずに家具職人の道を選んだ。

「ここにかく木が好き。木に対する愛情は誰にも負けません」木の特徴を最大限に配慮し



工房の内観

「木は木目、色味などそれぞれ表情が違います。木が作り上げた自然なデザインを生かした作品を作りたい。また、自身の作品にはビスは使用しません。ビスを使うと木本来の曲がる力が逃げることで、きまくなり、割れる可能性が高まります。長い期間、良い状態を保つためにも心がけている点です」



キックオフ・セッションにて

布田さんの代表作は、まな板や皿として使う「カッティングボード」だ。イタヤカエデなど1枚の木板から取っ手の部分も含めて削りたす。根気のある作業だが、受け渡しの時に客の喜ぶ顔を見ると疲れが吹っ飛ばすという。



代表作のカッティングボード

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー 小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。



普段使用している道具

「自由に作って」の後押しでプロダクトが決定



完成プロダクト「keyakeki」

「木を天板用に加工した。木の性質を生かしストレスを与えないことで、長く使える家具が出来上がると考えています。このkeyakekiは自分がいつも伝えたいと思っている木の魅力をしっかりと表現できました。」

他県の匠から刺激を受け、制作意欲が高まる

布田さん自身、今回の匠プロジェクトに参加して、その制作意欲が高まったとのこと。「匠」に選ばれてから緊張の連続でした。商談会ではほかの職人さんのプロダクトを見て、とても刺激を受けました。今後の目標は、木の仕入れ先や協力会社、木そのものも「地元秋田」に拘り続けながら、秋田産木材の魅力を国内や海外に発信していくことです。」と語る。

また、3種類の木は木目、色合いがそれぞれ違います。木の性質を含めて、最適な組み合わせを考えました。」
こだわった点は他にもある。正面から見るとボックス部分が見えてくる点だ。通常は両端の脚のほか、重さに耐えるため真ん中にも脚を付ける。それは天板やボックスを支えるためや、ボードにテレビや家具などを置いたときに重さで真ん中部分が反り返らないように通常は必要な部品だ。ところが今回は「今まで作ったことのない作品への挑戦を

布田さんが取り組んだのは3種類の木で構成されたリビングボードだ。プロダクト名は「keyakeki」。プロダクトの大部分で使われているケヤキの名前の由来である「keyakeki」から名付けた。プロジェクト当初は何を作ればいいのか見当も付きませんでした。キックオフ・セッションで木製の火鉢というアドバイスをいただき製作に取り掛かりましたが、工程を考えながら、木を扱う職人として木の魅力を一番伝えられるのは家具ではないかと思うようになりました。サポーターメンバーの川又俊明氏が言ってくれた「自由に作って」というのも決断の後押しとなり、今まで作ったことのないデザインの家具を作ることを決心しました。」と布田さん。



布田さんの制作風景



布田 信哉
秋田/家具職人

2015年、オーダー家具・木製雑貨を扱う「HOLTO」を設立。無垢の木に拘り、木の持つ温もり、自然の作り出すデザインを大切に木が一番良い状態で行われるような商品製作している。2017年HOLTO cafe&galleryをオープンする。地域の中心市街地活性化に取り組み。北秋田遊地祭(キタアキタアジサイ)projectでは木材発信での地域おこしに携わり、秋田県産材を使用した人力車を製作。県産材の活用は焦点を置き、県産材又は国産材の普及、活用に力を入れている。

